

## 第4章 形態学的研究

漆櫛 42点、籃胎漆器 35点、耳飾 12点、垂飾 9点、腕輪 26点、漆塗繊維製品 10点、編布 1点、漆塗樹皮製品 1点の計 136点を資料化した。これは質・量ともに国内屈指といえる。多くは出土層位から大洞C2式新段階から大洞A1式に位置づけられる。以下器種別に述べる。

### 第1節 漆櫛 (図版1～42)

計 42点を図示した。本対象資料のなかでは最も数多い。出土地点の内訳は、推定を含むと東区 8点、西区 34点である。地区別では東区C地区 4点、西区D地区 9点、同E地区 6点、同F地区 3点、同M地区 1点となっている。層序別では東区 14層 1点、同 15層 1点、同 16層 4点、同 18層 1点、西区V層 12点、同VI層 21点、同VII層 1点で、東区は大洞C2式期、西区は大洞A式期が多い。すべて結歯式である。赤漆で覆われた頭部のみが残存し、櫛歯があった部分は空洞となる。

以下、東区・西区の順で、層序順(台帳番号順)に述べる。

#### 図版1 漆櫛 (O-36、弘大1)

東区 16層出土と推定される。頭部の約 1/2を欠く。縦約 1.0 cm、幅約 3.6 cm、厚さ 0.7 cmが残る。櫛歯痕は 8本分残る。復元幅は約 7.5 cmで櫛歯が 16本と推定される。頭部上面には少なくとも 2条 1組の突起が残る。上辺側と下辺側、計 2段の隆帯が巡る。頭部断面はきのこ形で、平面形は左右が上向きに反る細長い弓形と推測される。

#### 図版2 漆櫛 (O-38、弘大28)

東区 16層出土と推定される。片方の端部を欠く。縦約 1.8 cm、幅約 7.5 cm、厚さ 1.6 cmが残る。櫛歯痕は 10本分残る。復元幅は約 10 cmで、櫛歯は 13本と推定される。平面形は左右が上に反る細長い弓形と推測される。頭部上面は平坦で装飾はなく、端部はへら状に突き出る。上辺側が太く下辺側が低い計 2段の隆帯が巡る。頭部断面はきのこ形である。

#### 図版3 漆櫛 (O-45、弘大2)

東区 18層出土である。頭部の約 1/2を欠く。縦約 1.5 cm、幅約 4.3 cm、厚さ 0.6 cmが残る。櫛歯痕は 9本分残る。復元幅は 8 cm、櫛歯は 14本と推定される。頭部上面は平坦で装飾はなく、上辺側と中央、下辺側、計 3段の隆帯が巡る。平面形は本資料のなかで唯一、山形と推測される。

#### 図版4 漆櫛 (O-47、弘大3)

東区 15層出土。縦約 1.1 cm、幅約 1.8 cmが残る。頭部小片である。櫛歯痕は 5個残るが、全体形が復元できないため、櫛歯数は不明である。上辺側と下辺側、計 2段の隆帯が巡る。頭部断面がきのこ形で、湾曲する形から平面形は左右が上向きに反る細長い弓形と推測される。

#### 図版5 漆櫛 (O-52、弘大26)

東区 16層出土。頭部はほぼ完形である。縦約 1.2 cm、幅約 4.5 cm、厚さ 1.1 cmが残る。櫛歯痕は 10本ある。上辺側と下辺側、計 2段の隆帯が巡る。頭部断面がきのこ形で、表裏面がくびれる。平面形は左右が上に反る細長い弓形である。

#### 図版6 漆櫛 (O-57、弘大4)

東区 16層出土。上面と左右側面を欠く。縦約 1.4 cm、幅約 6.7 cmが残る。櫛歯痕は 13本ある。復元幅は約 7 cm、櫛歯は 13本と推定される。上辺側と下辺側、計 2段の隆帯が巡る。断面形は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する带状である。頭部上面を欠くが、何らかの装飾があった可能性が高い。

**図版 7 漆櫛 (O-91、弘大 5)**

東区 14 層出土。頭部の 1/2 ほどを欠く。縦約 1.4 cm、幅約 3.7 cmが残る。櫛歯痕は 7 本分残る。復元幅は約 8 cm、櫛歯は 15 本と推定される。頭頂部端が突き出て側面がくびれる。上辺側と下辺側、計 2 段の隆帯が巡る。きのこ形の断面から左右が上向きに反る細長い弓形と推測される。

**図版 8 漆櫛 (弘大 30)**

東区出土。頭部の 2/3 ほどを欠く。縦約 1.4 cm、幅約 5.5 cmが残る。櫛歯痕は 6 本分残る。復元幅は約 12 cm、櫛歯は 13 本と推定される。上辺側と下辺側、計 2 段の低い隆帯が巡る。端部は円柱形の装飾があり、上面には 2 条 1 単位の突起がある。断面は縦板形で、左右が上向きに湾曲した帯状と推測される。

**図版 9 漆櫛 (O-207、弘大 7)**

西区 Vb4 層出土。全体の 2 割程度を欠く。ほかの漆櫛と異なり、塗膜が消失し、赤い粘土に覆われたような状態で脆弱である。縦約 1.4 cm、幅約 5.5 cmが残る。復元幅は約 6 cm、櫛歯痕は 18 本と推定される。左右端部に突起が付く。断面は縦板形で隆帯は認められない。平面形は上辺の反りが弱く長方形に近い。

**図版 10 漆櫛 (O-237、弘大 8)**

西区 Vc 層上面出土。保存状態が悪い小片である。少なくとも 4 片ある。

**図版 11 漆櫛 (O-324、弘大 9)**

西区 Vc1 層出土。保存状態が悪い小片である。少なくとも 5 片ある。表面には赤色顔料が残る。

**図版 12 漆櫛 (O-341、弘大 37)**

西区 Vb5 層出土。端部のみである。縦約 1.1 cm、幅約 3.0 cm、厚さ 0.8 cmが残る。櫛歯痕は 4 本分残る。断面は縦板形で上辺側と中央、下辺側、計 3 段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、左右が上向きに湾曲した帯状と推測される。

**図版 13 漆櫛 (O-341、弘大 38)**

西区 Vb5 層出土。頭部の 1/3 ほどを欠く。縦約 1.1 cm、幅約 3.5 cm、厚さ 0.7 cmが残る。櫛歯痕は 7 本分残る。復元幅は約 7 cm、櫛歯は 10 本程度と推定される。上辺側に高い隆帯、中央、下辺側に低い隆帯が巡る。断面はきのこ形で平面形は上辺の左右が上向きに反り、下辺は直線状である。

**図版 14 漆櫛 (O-452、弘大 10)**

西区 Vc1 層出土。端部のみである。縦約 1.3 cm、幅約 2.4 cmが残る。櫛歯痕は 4 本分残る。復元幅は約 7 cm、櫛歯は 11 本ほどと推定される。上面と短頂部を欠くものの装飾があったと推測される。上辺側に高い隆帯、中央、下辺側に低い隆帯が二段巡る。断面はきのこ形で左右が上向きに反る細長い弓形と推測される。

**図版 15 漆櫛 (O-453、弘大 11)**

西区 Vc1 層出土。ほぼ完形である。縦約 1.0 cm、幅約 7.2 cmが残る。櫛歯痕は 16 本分ある。頭部上面は平坦で装飾はなく、端部はへら状に突き出る。上辺側が太く下辺側が低い計 2 段の隆帯が巡る。頭部断面はきのこ形である。平面形は左右が上に反る細長い弓形と推測される。

**図版 16 漆櫛 (O-889-2、弘大 815)**

西区 Vc1 層出土。頭部約 1/2 を欠く。縦約 1.8 cm、幅約 4.4 cm、厚さ 1.6 cmが残る。櫛歯痕は 11 本分残る。復元幅は約 9 cm、櫛歯は 20 本ほどと推定される。端頂部には三叉文が施された花卉のように開いた装飾突起が付く。上面を欠くがここにも突起があったとみられる。断面は縦板形で、下辺側に低い隆帯が巡る。平面形は上辺の左右が上向きに反り、下辺は直線状である。

**図版 17 漆櫛 (O-607、弘大 13)**

西区Vc7層出土。ほぼ完形で、縦約 1.3 cm、幅約 9.7 cm、厚さ 1.1 cm である。櫛歯痕は 19 本分ある。頭部上面は中央にA形突起、その左右に 2 条 1 組の小突起があり、端部はイカのヒレ形に突き出る。上辺側が太く下辺側が低い計 2 段の隆帯が巡る。断面はきのこ形で、平面形は左右が上向きに反る細長い弓形である。

**図版 18 漆櫛 (O-799、弘大 14)**

西区Vc7層出土。上面と左右側面を欠く。縦約 1.4 cm、幅約 6.3 cm、厚さ 0.7 cm が残る。櫛歯痕は 16 本分残る。復元幅は 7 cm、櫛歯は 17 本と推定される。頭部上面を欠くが、何らかの装飾があった可能性が高い。上辺側と中央、下辺側、計 3 段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状である。

**図版 19 漆櫛 (弘大 33)**

西区V層出土。今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理された資料である。端部の一部を欠くが、ほぼ完形である。縦約 1.7 cm、幅約 10.2 cm が残る。櫛歯痕は 20 本分残る。頭部上面を欠くが、何らかの装飾があった可能性が高い。上辺側と中央、下辺側、計 3 段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状である。

**図版 20 漆櫛 (弘大 29)**

西区Vb層出土。頭部の一部である。縦約 1.0 cm、幅約 2.0 cm、厚さ 0.5 cm が残る。櫛歯痕は 4 本分残る。上辺側と中央、下辺側、計 3 段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状とみられる。

**図版 21 漆櫛 (O-866、弘大 15)**

西区VIb層出土。上面と左右側面などを欠く。縦約 1.0 cm、幅約 7.3 cm、厚さ 1.0 cm が残る。櫛歯痕は 15 本分残る。復元幅は 8.2 cm、櫛歯は 16 本と推定される。上辺側と中央、下辺側、計 3 段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状とみられる。

**図版 22 漆櫛 (O-889-1、弘大 16)**

西区VIc層出土。脆弱なため今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理された資料である。1/3 ほどを欠く。縦約 1.5 cm、幅約 10.5 cm、厚さ 1.9 cm が残る。櫛歯痕は 9 本分残る。復元幅は 12 cm、櫛歯は 19 本と推定される。端頂部には花卉のように開いた装飾突起が付く。上面を欠くがここにも突起があったとみられる。上辺側、中央、下辺側に低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状とみられる。

**図版 23 漆櫛 (O-890、弘大 17)**

西区VIb層出土。頭部 1/2、および上面、突起を欠く。縦約 1.1 cm、幅約 4.4 cm が残る。櫛歯痕は 9 本分残る。復元幅は 10 cm、櫛歯は 17 本と推定される。上面の一部に突起が残る。上辺側、中央、下辺側に低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状とみられる。

**図版 24 漆櫛 (O-904-1、弘大 19)**

西区VIg層出土。端部のみである。縦約 2.0 cm、幅約 2.1 cm、厚さ 1.0 cm が残る。櫛歯痕は 3 本分残る。櫛歯は 10 本と推定される。端頂部は上に突き出る。上辺側に高い隆帯、中央、下辺側に低い隆帯が巡る。断面はきのこ形で平面形は上辺の左右が上向きに反り、下辺は直線状である。

**図版 25 漆櫛 (O-904-2、弘大 20)**

西区VIg層出土。中間と上部の一部を欠く。漆塗膜が剥げかかっており、脆弱である。縦約 1.6 cm、幅約 8.1 cm、厚さ 1.0 cm が残る。櫛歯痕は 12 本分残る。復元幅は 8.5 cm、櫛歯は 16 本と推定される。

上面の多くを欠くが、中央にA型突起、その両脇に小突起の装飾があった痕跡がある。不明瞭であるがA突起の両脇に黒漆による長方形の塗り文様がある。おそらく図版 31、図版 37 のようになるとみられる。上辺側、中央、下辺側に計3段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状とみられる。

**図版 26 漆櫛 (O-905、弘大 21)**

西区VIg層出土。1/2ほどを欠く。縦約 2.0 cm、幅約 4.4 cm、厚さ 1.0 cmが残る。櫛歯痕は 9 本分残る。復元幅は 8 cm、櫛歯は 15 本と推定される。頭頂部が突き出る。上辺側にやや高い隆帯、中央、下辺側に低い隆帯が巡る。断面はきのこ形で平面形は上辺の左右が上向きに反り、下辺は直線状である。

**図版 27 漆櫛 (O-906、弘大 22)**

西区VIg層出土。端部のみである。縦約 1.4 cm、幅約 3.1 cmが残る。櫛歯痕は 4 本分残る。櫛歯は 11 本と推定される。下辺側は不明であるが、上辺側に高い隆帯が巡る。断面はきのこ形で平面形は上辺の左右が上向きに反り、下辺は直線状である。

**図版 28 漆櫛 (O-908、弘大 23)**

西区VIg層出土。1/3ほどを欠く。縦約 2.4 cm、幅約 4.9 cm、厚さ 0.7 cmが残る。櫛歯痕は 10 本分残る。復元幅は 7 cm、櫛歯は 15 本ほどと推定される。厚さ 0.7 cmは他の頭部に比べると薄く、その分縦が広い。端頂部は上に突き出る。上辺側、下辺側、その間に3段、計5段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で平面形は左右が上向きに反る。本分析では唯一の形態である。

**図版 29 漆櫛 (O-909、弘大 830)**

西区VIg層出土。1/3ほどを欠く。縦約 1.9 cm、幅約 5.5 cm、厚さ 1.5 cmが残る。櫛歯痕は 10 本分ある。復元幅は 8 cm、櫛歯は 13 本と推定される。上面は平坦で装飾はない。上辺側に高い隆帯、下辺側に低い隆帯が巡る。断面はきのこ形で平面形は上辺の左右が上向きに反り、下辺は直線状である。

**図版 30 漆櫛 (O-926、弘大 801)**

西区VII a層出土と推定される。ほぼ完形品の優品である。縦約 2.1 cm、幅約 9.3 cm、厚さ 2.0 cmが残る。櫛歯痕は 13 本分ある。頭部上面は中央にA形突起、その左右に2条1組の小突起があり、端部はイカのヒレ形に突き出る。その構成は図版 17、図版 41 に類似する。上辺側が太く下辺側が低い計2段の隆帯が巡る。断面はきのこ形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状である。

以下は遺物台帳との照合ができず、付着土壌や保存状態などから出土位置を推測した資料である。

**図版 31 漆櫛 (弘大 34)**

西区VI層出土と推定される。頭部の1/2、側面、上面を欠く。縦約 1.6 cm、幅約 4.1 cm、厚さ 0.8 cmが残る。櫛歯痕は 8 本分ある。復元幅は 7 cm、櫛歯は 15 本と推定される。表裏面に黒漆による長方形の塗り文様がある。上辺側、下辺側、その間に二段の計4段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状とみられる。

**図版 32 漆櫛 (弘大 35)**

西区VI層出土と推定される。1/2ほどを欠く。縦約 1.7 cm、幅約 5.4 cm、厚さ 1.2 cmが残る。櫛歯痕は 7 本分残る。復元幅は 10 cm、櫛歯は 15 本と推定される。端頂部が突き出る。上面を欠くため装飾の有無は不明である。上辺側に高い隆帯、下辺側に低い隆帯が巡る。断面はきのこ形で平面形は上辺の左右が上向きに反り、下辺は直線状である。

**図版 33 漆櫛 (弘大 36)**

西区VI層出土と推定される。端部のみである。縦約 2.2 cm、幅約 2.1 cm、厚さ 0.8 cmが残る。櫛歯痕

は4本分残る。図版8に類似する。端頂部は円柱形の装飾が付く。上辺側と下辺側、計2段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、左右が上向きに湾曲した帯状と推測される。

**図版 34 漆櫛 (弘大 125)**

西区Ⅵ層出土と推定される。頭部の一部である。縦約 1.7 cm、幅約 4.5 cm、厚さ 0.7 cmが残る。櫛歯痕は4本分残る。

**図版 35 漆櫛 (弘大 39)**

西区Ⅵ層出土と推定される。頭部の1/3、上面を欠く。縦約 1.7 cm、幅約 5.2 cm、厚さ 0.8 cmが残る。櫛歯痕は9本分残る。復元幅は8 cm、櫛歯は15本と推定される。端頂部には2条の沈線による装飾が付く。上面を欠くが、端頂部を装飾することから、ここにも装飾があったとみられる。上辺側と下辺側、計2段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、左右が上向きに湾曲した帯状と推測される。

**図版 36 漆櫛 (弘大 40)**

西区Ⅵ層出土と推定される。1/3ほどを欠く。縦約 2.1 cm、幅約 6.1 cm、厚さ 0.9 cmが残る。櫛歯痕は11本分残る。復元幅は9 cm、櫛歯は17本と推定される。端頂部を欠くが、その痕跡からイカのヒレ形に突き出るとみられる。上面に十字交差する2条1組の小突起が付く。上辺側がやや高い隆帯、中央と下辺側にそれぞれ低い隆帯が巡る。断面はきのこ形で、左右が上向きに湾曲した帯状と推測される。

**図版 37 漆櫛 (弘大 41)**

西区Ⅵ層出土と推定される。上面を欠くがほぼ完形である。縦約 1.6 cm、幅約 8.3 cm、厚さ 1.0 cmが残る。櫛歯痕は15本である。上面を広く欠くが、小突起があった痕跡がある。中央から両脇に黒漆による長方形の塗り文様がある。図版25や図版31にも類例がある。上辺側、中央、下辺側に低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状である。

**図版 38 漆櫛 (弘大 42)**

西区Ⅵ層出土と推定される。端部のみである。縦約 2.1 cm、幅約 2.9 cm、厚さ 0.8 cmが残る。櫛歯痕は4本分残る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状である。

**図版 39 漆櫛 (弘大 80)**

西区Ⅵ層出土と推定される。上面を欠くがほぼ完形である。縦約 1.8 cm、幅約 7.9 cm、厚さ 0.9 cmが残る。櫛歯痕は12本分ある。上辺側、中央、下辺側に計3段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状とみられる。

**図版 40 漆櫛 (弘大 802)**

西区Ⅵ層出土と推定される。両端部を欠くがほぼ完形である。縦約 2.2 cm、幅約 8.1 cm、厚さ 1.1 cmが残る。櫛歯痕は14本分ある。端部を欠くが、へら状に突き出るとみられる。上面は固定紐の凹凸がみられるが、装飾は認められない。上辺側が太く下辺側が低い計2段の隆帯が巡る。断面はきのこ形で、平面形は左右が上向きに湾曲する帯状とみられる。

**図版 41 漆櫛 (弘大 803)**

西区Ⅵ層出土と推定される。片方の端部を欠く。縦約 1.2 cm、幅約 6.2 cm、厚さ 1.1 cmが残る。櫛歯痕は12本分残る。復元幅は10 cm、櫛歯は19本と推定される。頭部上面は中央にA形突起、その左右に2条1組の小突起があり、端部はイカのヒレ形に突き出る。その構成は図版17、図版30に類似する。上辺側が太く下辺側が低い計2段の隆帯が巡る。断面はきのこ形で、平面形は左右が上向きに反る細長い弓形である。

#### 図版 42 漆櫛（弘大 804）

西区VI層出土と推定される。完形である。縦約 1.2 cm、幅約 5.8 cm、厚さ 0.7 cmが残る。櫛歯痕は 16 本分ある。厚さ 0.7 cmは他の頭部に比べると薄く、その分縦が広い。両端頂部が上に突き出る。中央には 2 個 1 組の低い A 型突起が装飾される。上辺側、中央、下辺側に計 3 段の低い隆帯が巡る。断面は縦板形で平面形は長方形である。本分析では唯一の形態である。

### 第 2 節 漆櫛のまとめ（図 21）

漆櫛は頭部形態で大きく I～IV の 4 類型にまとめられる。I 類は断面が縦板形で、平面形が長方形や山形を基本形とする。3 点ある。左右に低い突起が付くものなど、大きさや細かな装飾が多様で、本調査では唯一の形態もある。図版 3 の山形頭部も含まれる。各層に一例ずつしかなく、搬入品の可能性も考えられる。

II 類は上辺が湾曲する湾曲帯状の頭部である。17 点ある。断面は縦板形で上辺側、中央、下辺側の少なくとも計 3 段の隆帯が巡る。幅 10 cm以上、櫛歯数 20 本を超える大型品がみられるのも特徴である。上面の装飾には図版 22・25 のように A 型突起とその脇に小突起と伴う例と、図版 8・33 のように円柱状の突起を伴う例がある。さらに図版 25・31・37 のように中央から左右両脇に黒漆による長方形の彩文をつける例がある。これらは上面を欠くが、おそらく中央に A 形突起脇の 2 個 1 組の小突起の下に彩色されたとみられる。出土層位から大洞 A 式期に属す例が多い。

III 類は断面が上辺側に大きく膨らむきのこ形の頭部である。10 点ある。平面形は II 類と同じ湾曲帯状のほか、上辺側のみ湾曲し下辺が直線を呈するものがあり、計 2 種に細分される。前者の湾曲帯状には図版 30 のような A 形突起+その脇に 2 個 1 組の小突起+イカのヒレ形の端部を持つ装飾をもつ例があり、下層の大洞 C2 式新段階に属す。一方、後者の上辺側のみ湾曲し下辺が直線を呈するものは上面が平坦で装飾がなく、端部がへら状に突き出るタイプが多い。これらは西区 V・VI 層にまとめ、大洞 A 式期に属す例が多い。

IV 類は細長い弓形の頭部で、断面は全てきのこ形となる。幅 5 cm以上の大型品と幅 5 cm未満の小型品に分けられる。高さ 1 cmほどで隆帯は計 2 段が多い。上面が平坦で装飾はなく、端部はへら状に突き出るタイプと、中央に A 形突起+その脇に 2 個 1 組の小突起+イカのヒレ形の端部を持つタイプの 2 種に細分される。タイプ別の出土層位は III 類に類似する。

### 第 3 節 籃胎漆器（図 22、図版 43～77）

35 点図示した。このうち 6 点は 1965 年発掘調査の際、撮影された出土状況写真があるものの、現物との照合ができなかったため「調査時確認資料」として出土状況写真を掲載した。この調査時出土状況写真からトレースされた須藤（1996）の図 3 を添付した。なお、これらの資料に該当する可能性がある破片はあるものの、接合が難しく確証がもてない。また破片のなかには本来、同一個体であったものから遊離した資料も含まれる可能性がある。

出土区別では推定を含むと東区 10 点、西区 14 点ある。地区別では東区 B 地区 1 点、同 K 地区 2 点、同 L 地区 1 点、西区 E 地区 6 点、同 F 地区 1 点、同 O 地区 1 点、同 R 地区 2 点である。層序別では東区 14 層 2 点、同 18 層 3 点、同 21 層 1 点、同 23 層 1 点、同 25 層 1 点、西区 V 層 4 点、同 VI 層 7 点あり、東区は大洞 C2～A 式期、西区は大洞 A 式期に属する。以下、東区・西区・不明・図版のみの調査時確認資料の順で、層序順（台帳番号順）に述べる。

**図版 43 籃胎漆器 (O-41、弘大 44)**

東区 14 層出土。土壌ごと取り上げられた資料で、その後の保存処理において土壌から資料を取り出して和紙に貼り付けて補強された。そのため現況は和紙に貼られた状態で彩文がある内面が観察できる。口縁部から底部の 1/3 ほどが残る。長さ約 15.1 cm、幅約 18.8 cm、器高約 1.65 cm、器厚約 0.2 cm を測る。現況は和紙に貼られているため平坦であるが、断面の凹凸からおおよそ口径 24 cm、底径 5.5 cm、器高 7 cm の浅鉢形に復元される。底面は四隅が突き出た方形である。外面は黒漆が塗られ、内面全体に彩文がある。伊藤 (1974) 第 2 図 3、須藤 (1996) 図 3-3c に該当する。彩文は  $\pi$  字文を基調とする複雑な入組文 2 単位が点対称に展開する (須藤 1996)。

**図版 44 籃胎漆器 (O-46、弘大 45)**

東区 19 層出土。口縁部を含む複数の破片である。口縁部弧長 16.0 cm、器高約 1.6 cm、器厚約 0.35 cm が残る。底部を欠くが、口縁部全周の 1/3 が残っており、口径 20 cm、器高 4 cm の外にやや膨らむ鉢形に復元される。口縁部は内側の玉縁である。内外面全体に赤漆が塗られ、文様はない。断面が湾曲することから鉢と推測される。口縁部近くに穿孔がある破片もある。この穿孔の内面は赤漆に覆われることから漆塗布前に予め穿孔されたものとみられる。

**図版 45 籃胎漆器 (O-65、弘大 46)**

東区 21 層出土。土壌ごと取り上げられた資料である。出土状態は複数のブロックがあり、編み目や質感が異なるため、少なくとも 2 個体分あるとみられる。収縮などによってすでに土壌から遊離した状態であったため、今回の保存処理において資料が取り出され、クリーニング、保存処理された。少なくとも 6 点の破片に分かれる。すべて胴部片である。最大 6.4 cm、器厚 0.2 cm を測る。ほかの資料に比べて器厚が薄い。鉢形の可能性が高い。彩文はなく内外面全体に赤漆が塗られる。

**図版 46 籃胎漆器 (O-67、弘大 63)**

東区 17 層出土。塗膜のみが残る脆弱資料なため、今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理された。口縁部から胴部の破片で、長さ約 6.0 cm、幅約 4.7 cm が残る。鉢か浅鉢と推測される。表面に縮み皺が多数ある。口縁部は内側の玉縁である。内面全体に赤漆が塗られ彩文はない。

**図版 47 籃胎漆器 (O-71 または O-72、弘大 832)**

東区 18 層出土。塗膜のみが残る脆弱資料なため、今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理された。口縁部～胴部と底部の一部が残る。口縁部弧長 16.0 cm、器高約 1.6 cm、器厚約 0.35 cm が残る。底部を欠くが、口縁部全周の約 1/3 が残っており、口径 20 cm、器高 4 cm の外にやや膨らむ鉢形に復元される。底部は四隅が突き出た方形とみられる。口縁部は内側の玉縁である。彩文はなく内外面全体に赤漆が塗られる。

**図版 48 籃胎漆器 (O-73、弘大 50)**

東区 18 層出土。塗膜のみが残存する。今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理された資料である。長さ約 15.2 cm、幅約 12.0 cm の範囲に破片が集中する。外縁の一部に口縁部とみられる弧状の破片があることから、全体形は不明なものの器種は鉢形もしくは浅鉢形になるとみられる。表面全体に赤漆が塗布され、彩文はみられない。

**図版 49 籃胎漆器 (O-75、弘大 819)**

東区 23 層出土。口縁部から底部付近の大型の破片 2 点である。復元最大で長さ約 13.8 cm、幅約 8.5 cm が残る。全周の 1/5 ほどが残る。口径 13 cm、底径 4 cm、器高 4.6 cm ほどの断面が直線の鉢形に復元される。底面は四隅が突き出た方形である。内外面全体に赤漆が塗られ、彩文はない。

図版 50 籃胎漆器 (O-99、弘大 52)

東区 25 層出土。土壌ごと取り上げられた資料で、その後の保存処理において土壌から資料を取り出して和紙に貼り付けて補強された。そのため現況は和紙に貼られた状態である。口縁部から底部付近が残る。最大で長さ約 15 cm、幅約 5.2 cm が残る。現況は和紙に貼られているため平坦であるが、口縁部の弧は 14.4 cm 分が残りに、口径 19 cm ほどの鉢形に復元される。内外面全体に赤漆が塗られ、彩文はない。

図版 51 籃胎漆器 (W-24-2-1、弘大 816)

西区 V c 層出土。胴部から底部付近の破片である。長さ約 8.0 cm、幅約 5.9 cm が残る。断面は直線状で浅鉢形に復元される。内面に彩文がある。外面は全面に黒漆が塗られる。彩文は図版 43 や図版 74 のような C 字あるいは  $\pi$  字文がある。

図版 52 籃胎漆器 (O-681、弘大 54)

西区 V c 7 層出土。保存状態が極めて悪いため、今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理された資料である。内面が観察できる。長さ約 8.0 cm、幅約 3.0 cm が残る。口縁部付近の破片で、その形から浅鉢の一部とみられる。彩文が確認できる。彩文は口縁に並行する文様があることから、図版 58 や図版 60 のような彩文の一部と推定される。

図版 53 籃胎漆器 (O-13、弘大 55)

西区 VI b 層出土。保存状態が極めて悪いため、今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理された資料である。3 点の破片である。長さ 1.3 ~ 3.2 cm、幅約 2.2 ~ 3.2 cm、器高約 1.5 cm、器厚約 0.15 cm が残る。器形は不明である。網代編みの胎部と外面の塗膜のみが残る。もともとは内面にも漆が塗られていたとみられ、一部に赤漆の塗膜が残る。端部の一部が炭化しており、埋没前に被熱したとみられる。

図版 54 籃胎漆器 (W-14?、弘大 60)

西区 VI b 層出土。少なくとも 8 点に分かれた破片である。図版 75 (W-14) に類似するが確証がもてない。口縁部から底部の口径 1/5 ほどが残る。最大の破片で長さ約 13 cm、幅約 5 cm、器厚約 1.4 cm を測る。口縁部からおおよそ口径 31 cm、器高 8 cm ほどの浅鉢形に復元される。口縁部は玉縁である。底面は四隅が突き出た方形である。外面は黒漆が塗られ、内面全体に彩文がある。彩文は黒漆が抜け落ちつつあるため不明瞭であるものの、渦巻文の一部とみられる。

図版 55 籃胎漆器 (W-15、弘大 805)

西区 VI b 層出土。本分析資料のなかでは最も保存状態が良い資料である。この籃胎漆器は、過去に永嶋正春氏により調査が行われ、復元全長 17.7 cm、胴部器厚は 1.4 mm、縁部の最大厚は 2.7 cm で幅 1 cm 程度の刷毛目が見られること、赤色顔料はベンガラであることが報告された (永嶋 1985)。口縁部から底部までがあり、口縁部からおおよそ口径 30 cm、器高 6 cm ほどの浅鉢形に復元される。口縁部は玉縁である。底面は四隅が突き出た方形である。口縁部には 2 個 1 組の穿孔がある。穿孔内面にも漆が塗られていることから、塗りの前に予め穿孔されていたとみられる。外面全体に黒漆が塗られ、内面に彩文がある。須藤 (1996) 図 3-3a に該当する。彩文は  $\pi$  字文がある。

図版 56 籃胎漆器 (弘大 75)

西区 V b 4 層出土と推定される。口縁部の小片である。長さ約 1.8 cm、幅約 2.6 cm、口縁厚約 0.4 cm、口縁約 1.8 cm が残る。口縁部外面側に玉縁がある。断面がやや湾曲する鉢とみられる。内外面全体に赤漆が塗られ、彩文はない。

図版 57 籃胎漆器 (弘大 122)

西区 V b 4 層出土と推定される。胴部の小片である。長さ約 1.5 cm、幅約 0.9 cm、器厚 0.35 cm である。

図版 56 と同一個体の可能性がある。内外面全体に赤漆が塗られ、彩文はない。

**図版 58 籃胎漆器 (W-24-1、弘大 57)**

西区VIg層出土と推定される。彩文の大型破片3点である。最大の破片で長さ約21.0 cm、幅約11.8 cm、器厚約0.4 cm、縁部の最大厚1.0 cmである。口縁部から胴部まであり、おおよそ口径30 cm以上、器高7 cmほどの浅鉢形に復元される。口縁部は内向きの玉縁である。外面全体に黒漆が塗られ、内面全体に彩文がある。彩文はC字文がある。

**図版 59 籃胎漆器 (W-24-2-2、弘大 817)**

西区VIg層出土。破片が少なくとも4点ある。最大破片で長さ9.2 cm、幅6.5 cm、器厚0.15 cm、口縁部7.0 cmである。口縁部から底部までがあり、口縁部からおおよそ口径14 cm、底径6 cm、器高4.6 cmほどの鉢形に復元される。口縁部は平縁である。底面は四隅が突き出た方形である。口縁部には3個1組の穿孔がある。穿孔内面にも漆が塗られていることから、塗りの前に予め穿孔されていたとみられる。内外面全体に赤漆が塗られる。

**図版 60 籃胎漆器 (弘大 65)**

西区VI層出土。破片が少なくとも5点ある。最大破片で長さ約31.8 cm、幅約22.8 cm、器高約0.45 cm、器厚約0.4 cmである。口縁部から胴部まであり、おおよそ口径30 cm以上、器高7 cmほどの浅鉢形に復元される。口縁部は内向きの玉縁である。口縁部には穿孔がある。穿孔内面にも漆が塗られていることから、塗りの前に予め穿孔されていたとみられる。外面全体に黒漆が塗られ、内面全体に彩文がある。須藤(1996)図3-3dに該当する。彩文はπ字文がある。

図版61～71は出土地点不明の径3 cm以下の小片である。ただし、保存状態から西区VI・VII層相当とみられる。このなかには、上記資料の一部の可能性が高い資料も含まれる。図版69は細かな破片の集合であったため、出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理された。

図版61～68は彩文、図版69～71は無文である。彩文のほとんどは浅鉢形、無文は鉢形と推定される。

図版72～77は、出土状況写真のみが残る資料(調査時確認資料1～5)である。全て浅鉢形である。図版72～75は須藤(1996)でも紹介された資料である。図版72は伊藤(1974)第2図1、須藤(1996)図3-1に該当し、本遺跡の彩文では最古段階に位置付けられる。図版73は伊藤(1974)第2図2、須藤(1996)図3-2に該当し、彩文はπ字文と工字文を組み合わせた複雑な入組文である(須藤1996)。図版74は伊藤(1974)第2図4、須藤(1996)図3-4に該当し、伊東・須藤(1985)で確認したところでは西区V l層出土である。π字文を基調とする。図版75は須藤(1996)図3-3bに該当し、π字文が認められる。図版72と図版73にはスケールが写りこんでいるため、おおよその寸法が分かる。図版72は口径28 cm、図版73は口径30 cmほどとみられる。また図版76と図版77にも白黒写真のため不鮮明であるものの、彩文がある。これら図版76・77は西区VI層と推定したが、東区の可能性も残る。また上記遺物のどれかの可能性が高い。

**第4節 耳飾 (図23、図版78～89)**

12点を図示した。すべて栓状耳飾である。出土地点別では東区1点、西区1点でほかは不明である。東区の1点は18層、西区の1点はVII a層出土である。いずれも大洞C2式新に属する。出土区不明なものも他の漆器の出土層からおおよそ大洞C～大洞A式に属すとみられる。台帳との照合が困難だったもの多くは小片で腕輪や漆塗膜などと混在してシャーレに入れられた状態だったため、そこから

選出した資料も含まれる。全体に赤漆が塗られる。

4点(図版79・81・83・85)は完形あるいは全体形が復元できる。図版79(O-926、弘大810)は本資料のなかでは唯一中実である。これは胎が木のような塊状であるためとみられる。上部径2.2cm、括れ部径1.7cm、下部径2.9cm、高さ1.5cmで全面に赤漆が塗られる。断面は太鼓形である。

図版81(弘大183)と図版85(弘大186)は中央孔がある。全体に歪むものの、図版81は上部径2.0cm、括れ部径1.5cm、下部径3.0cm、高さ1.5cm、図版85は上部径2.0cm、括れ部径2.0cm、下部径3.2cm、高さ1.5cmほどに復元される。形は骨角器にある弭形製品あるいは浮袋の口に似る。図版83(弘大70)は大型品である。最大径4.3cm、括れ部径2.7cmである。

そのほかの8点は破片である。すべて中央孔があり、上下どちらかが開くタイプである。

### 第5節 垂飾(図23、図版90~98)

9点図示した。従来、発掘調査時には櫛の一類型として捉えられており、後に漆塗りの際の刷毛説があったものである。調査の結果、上端に環があり、身体につけて吊り下げる構造を有す資料と判断されたことから垂飾とした。垂飾形耳飾あるいは服などの装飾品であったと推定される。本遺跡ではこれまで4点知られていたが、新たに5点判明した。

出土区別では東区2点、西区6点、不明1点ある。地区別では東区C地区1点、西区D地区3点、同N地区2点である。層序別では東区17層1点、同19層1点、西区VI層3点、同VII層2点ある。特に図版92・93、図版95・96の各2点はセットで出土した。この点からも垂飾形耳飾の可能性がうかがえる。層位的に大洞C2式新段階~A1式に属するが、西区VII層相当(大洞C2式新段階)でセットでの出土例を伴うことから、主に大洞C2式新段階に属すと推定される。

大きさは、高さ3.6~5.6cm、幅1.7~2.4cm、平均2.3cmである。高さは頭部や下部を欠く資料が多く差が大きいものの、残りの良い図版93の場合、高さ約5.6cmである。形態は、膨らみのある環がある頭部、その付け根から下部を束ねる中央部、座敷箒形に垂が下がる下部の3部位に分けられる。下部は座敷箒形に板状に広がり、その断面は風呂鍬の刃床のようにやや反る。それに対し頭部の環は垂直に交わる。このように大きさや構造には規格性が認められる。

頭部は下部を束ねて丸めて環を作り出す。環には中央が貫通する図版90・94・95・96と、漆でふさがった図版92・93・97の2種がある。環は紐を巻いて固定する。中央部は下部を固定するための紐の凹凸が表出する図版92~96・98と、厚く塗られてそれらの凹凸が見えない図版90・97の2種がある。下部は薄く細長い材が7~9本ほど垂れ下がる。全面に赤漆が塗られる。

### 第6節 腕輪(図23、図版99~124)

26点図示した。本検討の結果、出土時から認識できる厚みがあるタイプのほか、薄く帯状のタイプが多くあることが分かった。後者は耳飾や籃胎漆器の破片として混在していたため、最終的に最も数が増えた。

出土区別では東区12点、西区2点、不明12点ある。地区別では東区B地区1点、同C・C'地区7点、同E地区2点、同K地区1点、西区D・F地区各1点である。層序別では東区13・15層各1点、同18層2点、同20・21層各1点、同23・25層各3点、西区IV・VI層各である。層位的に主に大洞C2式新段階に属す。

保存状態について、図版105は土壌ごとに取り上げられた資料で、その後の保存処理において土壌から資料を取り出して和紙に貼り付けて補強された。そのため現況は和紙に貼られた状態である。また図版100、図版112の2点は今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、保存処理さ

れた。

全体形が分かるのは図版 100 と図版 105 の 2 点である。そのほか弧から径が推定できたのは 5 点である。

断面形で 2 類型に分けられる。まず図版 100 (O-32、弘大 82) を代表とする形態で、断面が丸形で厚みがある。2 個 1 単位の B 形突起が巡るのも特徴的である。図版 100 では 5 単位の B 形突起が巡る。図版 100 のほか、図版 101・102・104・106・107・113・120・124 の計 9 点が該当する。弧から推定される外径は図版 100 が 7.1 cm、図版 104 が 6.9 cm、図版 107 が 6.0 で径 6～7 cm を基準とする。厚さは太型と細型がある。太型は図版 100・102・104・106・124 のような径 0.4 cm ほどであるのに対し、細型は図版 101・107 のように径 0.1～0.2 cm でリング状である。B 形突起を含め全体を塑形したのちに漆を塗布する。東区 15 層以下で検出されており、ほとんどが大洞 C2 式新段階に属すとみられる。

次に図版 105 (O-74、弘大 831) や図版 114 (弘大 89)、図版 117 (弘大 92) を代表とする形態で断面が平形で薄く帯状である。上記断面丸形以外の計 17 点ある。大きさは幅 0.5～1.1 cm、平均 0.7 cm、厚さ 0.1～0.3 cm である。全体形が分かる図版 105 はつなぎ目から外れたため U 字形になったとみられる。弧から推定される外径は図版 103 が 7.2 cm、図版 110 が 6.5 cm、図版 114 が 7.3 cm、図版 117 が 6.8 で断面丸形と同じく径 6～7 cm を基準とする。さらにその構造によって 2 細分できる。ひとつは図版 103・108・109・118 の計 4 点で、厚さ 0.2 cm ほどとやや厚みがあり、2 個 1 単位の突起装飾が巡る。もうひとつは上記以外の 13 点で厚さ 0.1 cm と薄く脆弱である。内側のみキャタピラ状の連続的な凹凸がみられるのが大きな特徴である。前者の突起装飾を伴う腕輪は丸形と同じく東区 15 層以下で検出されておりほとんどが、大洞 C2 式新段階に属すとみられる。一方、後者のキャタピラ状の凹凸がある腕輪は大洞 C2 式新段階を主とするが、上層でもわずかに見られ継続時期が比較的長いとみられる。

## 第7節 漆塗繊維製品 (図 23、図版 125～134)

10 点図示した。撚糸や細く裂かれた植物の皮など 1 本ごとに赤漆が塗られ、固化しないうちに束ねて、曲げたり結ったりして形が作られた製品である。いわゆる糸玉を含むが、撚糸だけでなく細く裂かれた薄い植物の皮を用いるほか、結び玉だけでなく束を U 字に曲げて結んだものが多いのが本遺跡の特徴である。

出土区別では推定を含むと東区 5 点、西区 1 点、不明 4 点ある。地区別では東区 B 地区 1 点、同 C 地区 2 点、同 E・I 地区各 1 点、西区 N 地区 1 点である。層序別では東区 16・18・13 層各 1 点、同 25 層 2 点、西区 VI 層 1 点あり、ほとんどが大洞 C2 式新段階に属する。

図版 125～127、図版 131～134 の計 7 点は、脆弱な繊維の集合体のため今回の保存処理において出土状態のまま土ごとクリーニング、強化処理された。

図版 125 (O-51-2、弘大 826)、図版 126 (O-77、弘大 102)、図版 127 (O-84、弘大 96) は、東区 16 層以下より出土した。図版 125 と図版 126 は繊維の束を U 字に曲げて交差部を別の束で結ぶ。図版 127 もその一部とみられる。1 本 1 本の素材は幅約 0.6 mm～1.0 mm と細く断面は 1 mm 以下と薄い。そのほか、出土地点不明である図版 131～134 の計 4 点もバラバラとなっているものの、本来は束となっていたとみられる。

図版 128 (O-94、弘大 812) と図版 129 (弘大 827) も上記と同じ作りであるが、土から外れて全体が観察できる資料である。いずれも大洞 C2 式新段階に属する層から出土した。図版 128 は繊維を束

ねてU字に曲げた後、交差部を1本の繊維でぐるぐる巻きつけて固定される。1束の本数は図版125が見える範囲で11本程度、図版128が5本程度である。

図版130(O-900、弘大811)のみ西区IV層で大洞A1式に属す。その作りも上記とは異なる。まず素材はいわゆる糸玉と同じ断面丸形の撚糸が用いられる。1束の本数は30本を超える。束ねた素材が崩れないようにまず束を結んだ後にU字に曲げる。その後交差部を結ばずにしめ縄のようにさらに撚りをかけるようである。

### 第8節 編布 (図23、図版135)

6片2セットを図示した(図版135)。破片1~6の計6片に分かれるが、出土状況写真から破片1・2と破片3~6の2セットに分けられる。うち破片1・2は伊東(1966)の資料2、破片5・6は、同資料4、破片4は同資料3と該当するとみられる。破片3~6は東区I地区25層出土で大洞C2式新段階に属す。破片1・2も伊東(1966)から大洞C2式期に属す。従来、編布として知られている資料であり、尾関(2012)ではこれらのうち4点の情報があり、おそらく破片1・2を除く破片3~6が観察されたとみられる。今回の検討により新たに2片を見出すことができた。出土状況写真と比較するとこれらは3~6の順で繋がるかと推定される。新たに追加された破片1・2は一連とみられ、その形態は右回りにねじれており、漆に覆われていることから、S字方向に絞った漆漉し布として使われたものと分かる。復元すると長さ11cm、中央径1.8cmほどとなる。また出土状況写真をみると、破片3は端とみられU字状に湾曲する。破片4・5はもう一方の端とみられる。尾関(2012)によれば、編布の密度は経糸間隔10mm、緯糸6~8本/cm、緯糸の幅1.0mm、経糸・緯糸ともに諸撚り(Z)とされる。

### 第9節 漆塗樹皮製品 (図23、図版136)

調査当初は籃胎漆器と考えられていたが、胎の状況から樹皮胎と判明した。複雑な形の棒状素材に樹皮を張った後に赤漆が塗られる、あるいは固定紐がみられないことから樹皮付きの棒状素材に赤漆が塗られたとみられる。大型品の一部とみられ全体形の復元は難しい。

(上條信彦)

### 【引用文献】

- 伊藤玄三1974「縄文晩期籃胎漆器の文様」『法政大学文学部紀要』第20号、法政大学文学部  
 伊東信雄・須藤 隆1985『山王冢遺跡調査図録』宮城県一迫町教育委員会  
 伊東信雄1966「縄文時代の布」『文化』第30巻第1号  
 尾関清子2012『縄文の布—日本列島布文化の起源と特質—』雄山閣  
 須藤 隆1976「亀ヶ岡文化の終末と東北地方における初期弥生土器の成立」『考古学研究』第23巻第2号  
 須藤 隆1996「亀ヶ岡文化の発展と地域性」『日本文化研究所研究報告』別巻第33集  
 須藤 隆1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究—縄文から弥生へ—』纂修堂  
 須藤 隆編1996『国史跡 山王冢遺跡発掘調査報告書I』  
 永嶋正春1985「縄文時代の漆工技術—東北地方出土籃胎漆器を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集

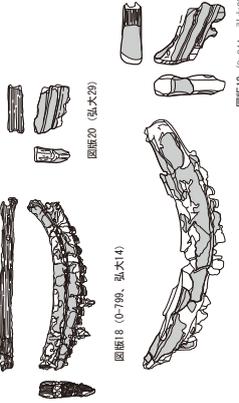
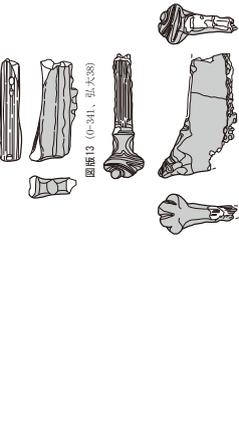
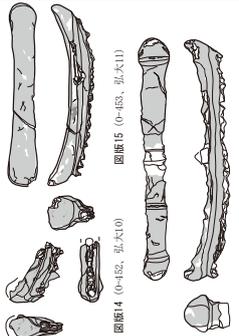
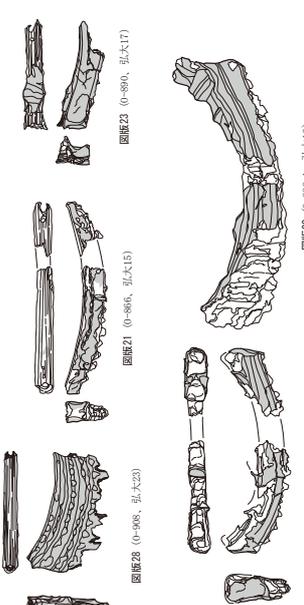
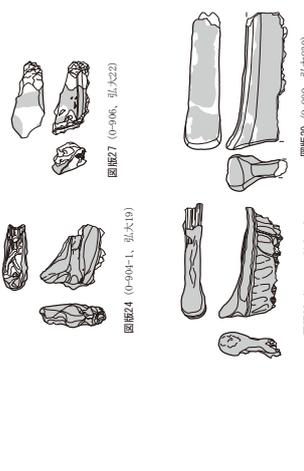
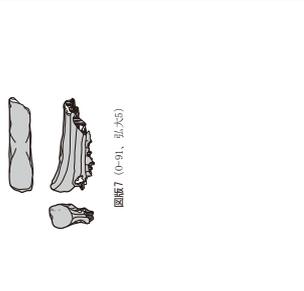
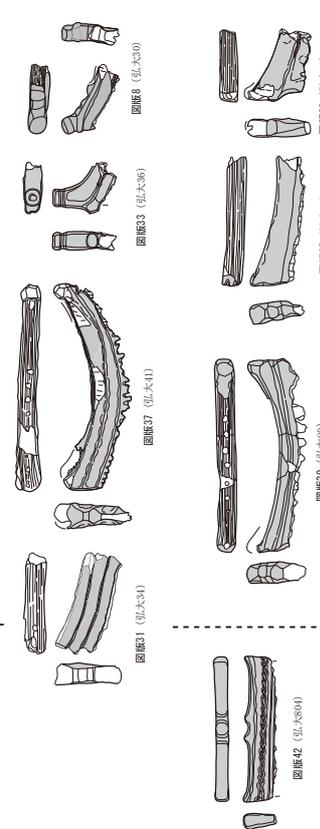
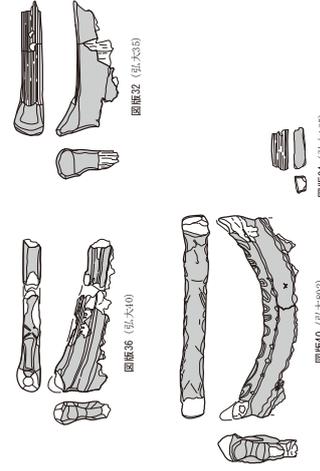
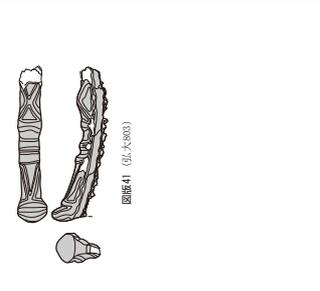
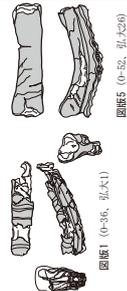
西区	東区	I 類【縦板形・長方形(山形)】	II 類【縦板形・湾曲帯状】	III 類【きのこ形】 湾曲帯状 上辺湾曲、下辺直線	IV 類【弓形】
大洞 A 2 式	V 層	 <p>図9 漆櫛 (0-207, 弘大7)</p>	 <p>図18 (0-199, 弘大14) 図19 (弘大33) 図20 (弘大29) 図21 (0-866, 弘大15) 図12 (0-341, 弘大17)</p>	 <p>図13 (0-341, 弘大38) 図14 (0-192, 弘大10) 図15 (0-483, 弘大11) 図16 (0-889-2, 弘大813)</p>	 <p>図17 (0-607, 弘大13)</p>
大洞 A 1 式	10 11a 11b 12 13 14 VI 層	 <p>図22 (0-889-1, 弘大16) 図23 (0-890, 弘大17) 図24 (0-904-1, 弘大19) 図25 (0-904-2, 弘大20)</p>	 <p>図26 (0-905, 弘大21) 図27 (0-906, 弘大22) 図28 (0-906, 弘大23) 図29 (0-906, 弘大30)</p>	 <p>図7 (0-91, 弘大5)</p>	
大洞 A 1 式 (推定)	VI 層	 <p>図31 (弘大34) 図32 (弘大41) 図33 (弘大30) 図34 (弘大30) 図35 (弘大39) 図36 (弘大42) 図37 (弘大41) 図38 (弘大42)</p>	 <p>図39 (弘大40) 図40 (弘大32) 図41 (弘大33) 図42 (弘大25)</p>	 <p>図43 (弘大80) 図44 (弘大80)</p>	
大洞 C 2 式新	15a ~ 26 VII 層	 <p>図45 (0-15, 弘大2) 図46 (0-57, 弘大4)</p>	 <p>図47 (弘大4) 図48 (0-57, 弘大4) 図49 (0-96, 弘大801) 図50 (0-96, 弘大801)</p>	 <p>図51 (0-36, 弘大1) 図52 (0-52, 弘大29) 図53 (0-38, 弘大28) 図54 (0-38, 弘大28)</p>	

図 21 山王団遺跡出土漆櫛 層位別形態変遷図

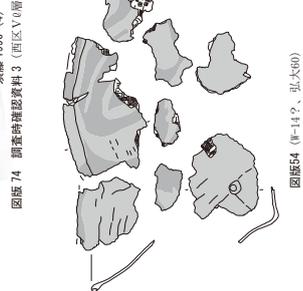
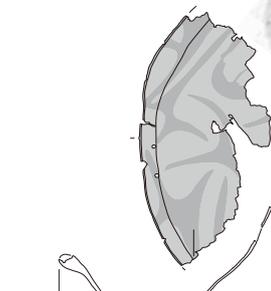
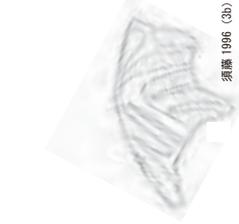
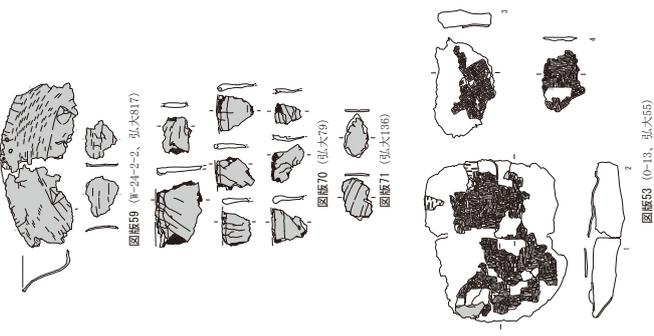
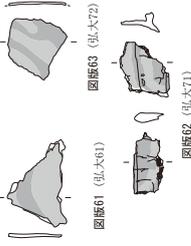
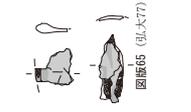
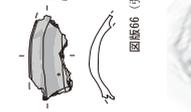
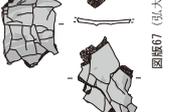
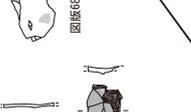
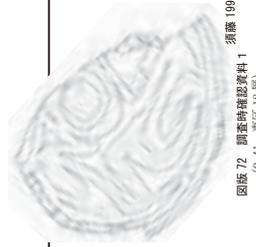
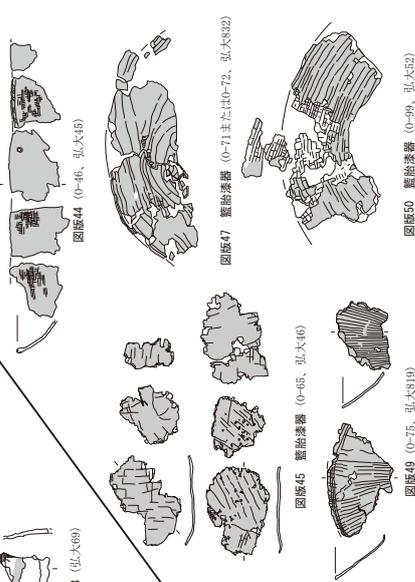
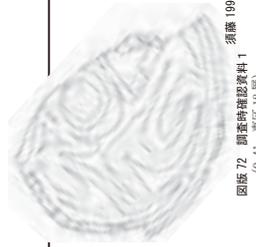
	西区	東区	彩文・浅鉢形	無文・鉢形
大洞 A 2 式	V 層		 <p>図版51 (W-24+2-1, 弘大3816)</p>	 <p>図版56 (弘大75) 図版57 (弘大122)</p>
大洞 A 1 式	V 層	10 11a 11b 12 13 14	 <p>須藤 1996 (3b) 図版43 (0-41, 弘大44)</p>  <p>須藤 1996 (4) 図版74 調査時確認資料3 (西区Y0層)</p>  <p>須藤 1996 (3a) 図版55 (W-15, 弘大305)</p>  <p>須藤 1996 (2) 図版73 調査時確認資料2 (東区14層)</p>  <p>須藤 1996 (3d) 図版60 (弘大85)</p>  <p>須藤 1996 (3b) 図版75 調査時確認資料4 (西区VI6層)</p>	 <p>図版59 (W-24+2-2, 弘大317) 図版70 (弘大79) 図版71 (弘大138) 図版53 (0-13, 弘大55)</p>
大洞 C 2, A 1 式	VI 層 VII 層	10 ~ 26	 <p>図版62 (弘大71)</p>  <p>図版63 (弘大72)</p>  <p>図版64 (弘大76)</p>  <p>図版65 (弘大77)</p>  <p>図版66 (弘大78)</p>  <p>図版67 (弘大80)</p>  <p>図版68 (弘大89)</p>  <p>須藤 1996 (1) 図版72 調査時確認資料1 (0-41, 東区18層)</p>	 <p>図版44 (0-46, 弘大45) 図版47 藍胎漆器 (0-71または0-72, 弘大832) 図版45 藍胎漆器 (0-85, 弘大46) 図版49 (0-75, 弘大819) 図版50 藍胎漆器 (0-99, 弘大52)</p>
大洞 C 2 式新	VIII 層	15a ~ 26	 <p>須藤 1996 (1) 図版72 調査時確認資料1 (0-41, 東区18層)</p>	

図 22 山王冢遺跡出土藍胎漆器 層位別形態変遷図

西区	東区	耳飾	垂飾	腕輪	纖維製品・編布・樹皮製品
大洞A'式	10			<p>圖版111 (0-17, 弘大388)</p>	
	11a 11b		<p>圖版82 (0-904-1, 弘大18) 圖版84 (0-918, 弘大24)</p>	<p>圖版99 (弘大31) 圖版100 (0-32, 弘大32)</p>	
大洞A1式	12		<p>圖版83 (0-904-2, 弘大22) 圖版85 (弘大80)</p>	<p>圖版113 (弘大15) 圖版114 (弘大59)</p>	<p>圖版130 (0-904, 弘大381) 圖版131 (弘大100)</p>
	13 14	<p>圖版86 (弘大187) 圖版87 (弘大36)</p>	<p>圖版88 (弘大128) 圖版89 (弘大389)</p>	<p>圖版115 (弘大90) 圖版116 (弘大51)</p>	<p>圖版132 (弘大101) 圖版133 (弘大383)</p>
大洞C2, A1式	10 ~ 26	<p>圖版80 (弘大389) 圖版81 (弘大187)</p>	<p>圖版90 (0-97, 弘大124) 圖版91 (弘大108)</p>	<p>圖版117 (弘大92) 圖版118 (弘大95)</p>	<p>圖版125 (0-81-2, 弘大329) 圖版126 (0-77, 弘大102)</p>
		<p>圖版82 (弘大320) 圖版83 (弘大70)</p>	<p>圖版92 (弘大320) 圖版93 (弘大380)</p>	<p>圖版119 (弘大94) 圖版120 (弘大119)</p>	<p>圖版127 (0-84, 弘大99) 圖版128 (0-94, 弘大312)</p>
大洞C2式新	15a ~ 26	<p>圖版78 (0-51, 弘大38) 圖版79 (0-28, 弘大310)</p>	<p>圖版94 (0-55, 弘大125) 圖版95 (0-924-2, 弘大323)</p>	<p>圖版101 (0-51, 弘大383) 圖版102 (0-60, 弘大109)</p>	<p>圖版129 (弘大327) 圖版130 (0-91, 弘大314)</p>
		<p>圖版84 (弘大128) 圖版85 (弘大38)</p>	<p>圖版96 (弘大389) 圖版97 (0-924-1, 弘大25)</p>	<p>圖版121 (弘大99) 圖版122 (弘大252)</p>	<p>圖版134 (弘大329) 圖版135 (0-91, 弘大38, 806, 807, 813, 814)</p>

图23 山王冢遺跡出土耳飾・垂飾・腕輪・纖維製品・編布・樹皮製品 層位別形態變遷圖